

PHP

おすすめの「日本ワイン」「日本酒」と飲み方指南

ほんとうの時代

[ライフプラス]

50代からの暮らしに“質と楽しさ”をプラス!

Life+



「総力特集」今、日本の酒が旨い!

今夜はワイン、
とびきり日本酒

「日本のワイン」はこんなに美味しくなった!

日本人の味覚にじっくりとなじむ国産ワインから、
和・洋・中の食を引き立てるこだわりワインまでを、
通好みの選りすぐり「日本酒」とともに紹介。

健康特集

健康で若返った体をつくる

「血液循環体操」

特別企画

気になる年金ニュースと
「自分年金」の作り方

2

2012 No.256
定価680円

高齢化社会を生き抜くために 人と人との「絆」について改めて考える

経済産業省は、安心と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」の創出に向けて、新たな「絆」と生活に寄り添う「ライフエンディング産業」の構築について、動き出しています。その研究会の委員長を務め、報告書をまとめられた専修大学の嶋根克己先生に、いま見直されている「絆」についてお話を伺いました。

日本の葬儀事情は過去に二回大きく変化した

日本の葬儀事情は、時代とともに変化してきました。他人の葬儀に対して専門的なサービスを提供する、いわゆる葬祭業者が出現したのは、そんなに昔のことではありません。数十年前までは、葬儀は地域の人々の力を借りて行なうものでした。伝統的な価値観や社会関係、近代化やライフスタイルの変化によって、葬儀事情は大きく変化しました。日本の農村部で行なわれていた伝統的な葬儀は、村じゅう総出で、近所の人々が葬儀の手伝いをしていました。参列者や手伝いの人々の食事を用意するのも、近所の女性たちでした。

現代のお金で買われているサービスが、地域集団の人たちの仕事のほとんどだったのです。

こうした日本の葬儀事情は、過去に大きく二回の変化を遂げました。まず、高度成長期を迎えたころです。地域集団が壊れて、そのかわりに葬祭業者が葬儀を手伝うようになりました。

次の大きな変化は、二十一世紀に入ってからです。核家族が細分化されて、「家」の概念が薄くなったことも、葬儀の簡素化が進んだことに拍車をかけました。

もう少し、葬儀の変化についてみてみましょう。かつては地域集団が支えてきた葬儀は、家族が中心となり、職場集団が手伝うといったスタ



嶋根克己 専修大学人間科学部教授

しまね・かつみ ●1956年、名古屋市生まれ。89年中央大学大学院博士課程中退後、筑波大学を経て、91年より専修大学に勤務。専門は社会学(社会意識論)。共著に、「生きづらさの時代」(専修大学出版局)など。

イルに変化しました。

高度成長期の変化は、葬儀を手伝う人が地域の人々から職場集団に変わったのです。家族は受け取った香典の中から、葬祭業者のさまざまなサービスの提供を受けました。

葬儀は縮小・簡素化に 向かつて大丈夫なのか

葬儀スタイルは、バブル崩壊まで派手になりながら存続しましたが、バブルが崩壊して経済成長が止まると、あまりにも高額な葬儀に反省と疑問が生まれました。少子高齢化により、職場集団もあてにできなくなり、葬儀は縮小・簡素化に向かう傾向もあります。

さらに日本の葬儀は、今世紀に入ってスタイルが劇的に変化しました。お墓を必要としない人たちが急増したのです。一九九〇年ごろから出現した「散骨」や「自然葬」、最近では「樹木葬」や遺骨をベンダントに収める「手元供養」などです。伝統的なスタイルとは異なる埋葬を望む人たちも、故人とのつながりを求めて葬儀といったセレモニーは行ないません。ところが最近、「直葬」と呼ばれるスタイルが出現してきました。これは、葬儀を儀式として考えないので告別式など行わず、ただの遺体処理として捉えているといえるでしょう。このように日本の葬儀事情の変化をみたとき、改めてもう一度、人と人との「絆」について考え直す時期に

さしかかっているのではないのでしょうか。

葬式は死者との コミュニケーションの始まり

葬儀は亡くなった人と生きている人との接点であり、生きている人同士の接点でもあるのです。人間が社会的な存在である限り、他者とのコミュニケーションは続きます。葬儀に家族や身内など、多くの人が集まることにより、「命の大切さ」を知ることになるのではないのでしょうか。

葬儀は、死者とのコミュニケーションの始まりです。故人が生きてきた道筋を想うことは、自分の未来を考えるきっかけにもなります。故人に礼を尽くすことは、自分の生き方を大事にするにもつながります。

また葬儀は、人と人とのつながりの場であり、ほころびかけた人間関係の修復の場です。したがって、葬儀は自分のためでもあるのです。いつかは、誰でも自分の死を迎えるときが来ます。死を意識することによって、今の生きている状態を愛おしく思える。若いときから死を意識することが重要です。

葬儀は何のためにあるのか、誰のためにあるのかを考えたとき、将来の自分自身のためにあると思えば、葬儀に対する考え方も変わってくるのではないのでしょうか。故人を偲び、心より弔いたいという気持ちは、とても重要だと思えます。

葬儀というものは「遺族が 当事者意識を高く持つこと」

肉体や頭脳だけでなく感情を押し殺し、緊張や忍耐などを必要とする労働のことを感情労働といいます。葬祭業者は、心理的ストレスのかかる感情労働者です。遺族の心に寄り添いながら、葬儀がうまく運ぶような心配りも必要です。

そして、消費者はどのような葬儀を望んでいるかを慮り、できる範囲でやらせていただくという姿勢が大切で、生活者はそういった葬儀社を選ぶことが大変重要です。

私たちは、これからの高齢化社会を生きていくために、定年後の生き方を考える必要があります。葬儀では当事者意識を強く持ち、人と人との「絆」を大切に想い、人を偲ぶ気持ちを忘れず、自分で決めるという責任と自立も大切です。

いつかは迎える死について考え 日ごろから悲しみを受け入れる準備をする

東日本大震災を機に「絆」という言葉が、世間でよく聞かれるようになりました。遺された家族の心情に触れることで、葬儀の意義を見つめ直すことの大切さも説かれています。経済産業省大臣認可の葬儀社団体・全葬連（全日本葬祭業協同組合連合会）理事であり、東京都葬祭業協同組合理事長も兼ねる濱名雅一氏にお話を伺いました。

時代とともに変化する 葬儀は日本文化の継承

ここ数年、縁がないと思われていた価格競争の波に葬祭業界はのみ込まれています。日本の葬儀事情が変化してきたことが、大きな要因のひとつでしょう。葬儀は、日本文化の継承でもあると考えています。文化は時代とともに変化し、それに伴い葬儀の形式も遺族の意識も変わりました。私たち葬儀社の意識も変えていく必要があると感じています。

私たちは、葬儀において最も尊重されるべきことは、故人の尊厳・ご遺族の悲しみ、集う人々の想いであると考えています。そして、それぞれの故人の意思、ご遺族の想いに耳を傾けたうえで、葬祭サービスを提供することを心がけています。

大変な状況下でも 故人に敬意を払う

痛ましい惨状の被災地で被災

者が大変な状況下にあっても、人間が本来持っている「命の大切さ」や「家族を想う気持ち」が感じられました。

そして、都内でも故人をおくる側の心に変化が生じています。「価格の安い葬儀」の象徴ともいえる火葬のみ（いわゆる直葬）が、徐々に減少し、「ちゃんとお葬儀はしたい」など、できる限り精一杯おこなってあげたいといった故人に敬意を払う心情が伺えます。これは、人間本来の姿、本能を取り戻しつつあると考えてもよいのではないのでしょうか。

震災を機に考える 葬儀の意義について

さらに東日本大震災より、葬儀に関する意識の変化が見られます。震災前までは、葬儀にお金も時間もかけたくないという施主さんが多くいらっしやうったことも事実です。

しかし、震災をきっかけに故人を偲び、手厚く弔いたいという人としての本能の表れを感じ

始めています。家族葬よりも一般葬の方が自己負担は少なく、一堂に会してお別れができます。参列者からもよかったです。多くの声が上がっています。

家族葬という言葉があります。費用がかからないのが家族葬ではありません。一昨年のこと、三人のお子さんがお花好きの母親のために、会場を花でいっぱい飾りました。費用もかかりましたが、大変満足されていました。最後の親孝行をされたのでしよう。

一生のうちで喪主を務めることは一回、あるいは二回です。いつかは迎える死について考え、日ごろから悲しみを受け入れる準備をすることが大切です。そのためにも、かかりつけ医のようにいつでも相談できる葬儀社を選んでおくことをおすすめします。

今後も葬儀の本質についての確かな情報を発信し、ご遺族の想いを大切に心の絆を取り戻す活動を続けてまいります。

安心・信頼できる葬祭業者を選ぶには



このマークの事業所は信頼できる葬儀社です。

全葬連は、葬祭サービスガイドラインを制定し、遵守しております。

全葬連は、経済産業大臣の認可を受ける日本最大の葬祭専門事業者団体です。全国に58協同組合、1,421事業者の全国ネットワークを持ち、消費者の皆様安心して葬祭サービスを受けて頂くための行動指針として、業界初となる「葬祭サービスガイドライン」を制定しました。全国の加盟葬儀社がこのガイドラインを遵守しておりますので、安心してご相談ください。

私たちは、人と人との「こころ」をつなぐ葬儀をご提供いたします。

ある葬儀のお話-1 北海道 K様(60歳)

喪主様「皆運だし、皆様にお越しいただくのは気が引けますので、身内でこじんまり葬儀をします」と希望されました。

しかし通夜当日、次から次へと参列者が殺到し、印籠収容の式場が溢れんばかりになりました。

「無理してこんでもいいのに、『そんなわけいかない』や、世話になっただし。」喪主様は感激やら申し訳ない気持ちで涙が止まりませんでした。「家族でするからと言ったのに、ほんと…ありがたいですね。」と喪主様。

「故人や奥様の人徳だと思えます。」と申し上げると、また泣き出してしまわれました。

ある葬儀のお話-2 東京都 Y様(56歳)

「久しぶりに会う親戚に、失礼のないようにしたい。」と希望される喪主様に「故人様のアルバムをお持ちいただけませんか？」とご提案しました。通夜ふるまいが始まるまで、喪主様はご親戚の皆様へ、アルバムをお見せしていました。

遠くから聞いてますと笑い声「あの頃はおじさんも元気だったよな。」留さんで、思い出話、まさに泣き笑いです。

「失礼のないように頑張ってたけど、みんなとゆっくり話せた。」と喪主様「皆様の心に残るご葬儀だったのではないですか？」と申しますと「葬儀社さんにそうしてもらえると嬉しいです。」というお言葉をいただきました。

お気軽にお問い合わせください。



経済産業大臣認可 **全日本葬祭業協同組合連合会** (略称:全葬連)

〒108-0075 東京都港区港南2丁目4番12号 港南YKビル4階

くわしい情報はホームページで <http://www.zensoren.or.jp/>

お電話でのお問い合わせは **03-5769-8701 (代表)**